

古事記読書会

「弥栄(いやさか)の会」

2020年度第10回報告書

■開催日：2021年2月27日(土)

9:30～11:30

■開催場所：Zoomにて開催

■参加者：7名(正会員5名、学生会員2名)

■内容：

(1)参加者自己紹介

(2)あらすじ確認

※参考：第一章～第十章のあらすじ(文責：小林)

「受け日」(うけひ)：第一章～第四章)

第1章 なきいさち

伊邪那岐大御神の子：天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三姉弟。父が須佐之男命に「ことよさし」として現世の国造りの使命(国土開拓)を命ぜらる。須佐之男命は移動中の困難に遭い、荒れ果てた現世を見て使命の尊さを忘れ、姉兄を羨み「なきいさち」状態となる。そこへ父伊邪那岐大御神が現れて叱り「神やらい」として須佐之男命を追放する。

第2章 まいのぼり

須佐之男命は反省し高天原にいる天照大御神を訪ねることを父に提案する。父は天照大御神の元で修行することに同意し立派な「まいのぼり」をするよう命ぜらる。須佐之男命は「みたましずめ」をして立派なまいのぼりについて覚り、現世のあらゆる穢れを背負って正々堂々と高天原にまいのぼっていく。

第3章 いつのをたけび

天照大御神は須佐之男命の反省を大いに喜び、ひかりの神としての威厳を示し弟の心を完全な状態に整えるために男神の姿(「いつのをたけびの準備」)で迎える。須佐之男命はそれを受け止めてさらに反省する。天照大御神の光を受け須佐之男命に怪しき心が無くなり清明心になっていることがわかるが、天照大御神はその証をするよう命ぜらる。

る。

第4章 うけひ

須佐之男命は天照大御神の「おひかり」に包まれ御魂鎮めを続け、無色透明になりただ「おひかり」だけになる(「うけひ」)。天照大御神はさらに第二の証を立てるよう命じ、須佐之男命は御子を生むことを提案する。

「勝佐備」(かちさび)：第五章～第十章)

第5章 あめのやすかは

須佐之男命は受け日の過程で見事なひかりの流れ(「あめのやすかは」)を発見したことを天照大御神に伝え、天照大御神はそれが須佐之男命に見えたことを大いに喜びそこで一大事業(「みこうみ」)をすることを提案する。※あめのやすのかは：課題を背負っているものの「いのち」本質

第6章 あめのまなぬ

須佐之男命は「受持ち」である現世の開拓を急ぎたいと考えるが、それに必要なものを天照大御神から問われ、「手」「太刀」(「十拳剣」と答える。「なきいさち」の頃は「殺太刀」となっていたがこれを「生太刀」とするため、天照大御神は「あめのやすのかは」の中に入る。その中の「あめのまなぬ」で禊をし殺太刀は生太刀となる。

第7章 いふき

天照大御神は「あめのまなぬ」において生太刀に息を吹きかけ(「いふき」)三人の姫御子が生まれる(「みこうみ」)。

第8章 やさかのまがたまのいほつのみすまるのたま

須佐之男命も「みこうみ」をするため、十拳剣に代わるものを天照大御神に求め、天照大御神は「八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠」を差し出す。須佐之男命はそれを受取り、「あめのまなぬ」において「いふき」を行い五人の彦御子が生まれる(「みこうみ」)。

第9章 みこのりわけ

三人の姫御子は、須佐之男命の生太刀を「ものだね」として生まれたので須佐之男命の受持ちの協力者であり、五人の彦御子は、天照大御神の珠を「ものだね」として生まれたので天照大御神の

受持ちの協力者である。八柱の御子達はそれぞれ自分の名前の意味と受持ちとの関係を申し述べる第10章 かちさび

須佐之男命は自らの受持ちである現世の開拓に参考となる高天原の調査と勉強を始める。農業等の修行と研究に熱心に励むあまり自分の考えを試すようになり高天原の神々と衝突してしまう。

(3) 朗読

阿部國治著・栗山要編「第五集 勝佐備(かちさび)」第九～十章を、Zoomを用いて全員で順番に輪

(4) 読後感

○一般的な古事記では、須佐之男命が天照大御神に勝ち高天原で暴れるように描かれているが、阿部先生の解釈では全く異なっており認識が違った。「勝つ」ということが「困難に打ち勝つ」「苦しみに耐え抜く」という言葉として使われている

○「『勝つ』という言葉が、負ける相手を作って喜ぶようになったのは『言葉の墮落』という箇所が印象に残った。やまと言葉の意味は深い。「佐備」についてはまだ漠然としているが、やまと言葉は前向きな意味合いが強く、いずれやまと言葉で会話が出来るようになるよ

○須佐之男命の受持ちは開拓でありエンジニアだなと思う。共感できるところがある

○天照大御神が五人の彦、須佐之男命が三人の姫を生み、それが現代まで続いており、自分達もその子孫なのだと思える感じがした

○須佐之男命は現世の開拓に生かせるように高天原のしくみを研究し、度が過ぎ改良・改革したいというところまで至り独りよがりになってしまい周囲と衝突した。今のテレワークでも独りよがりになってしまいがちで同様になることがあると気付いた

○自分の受持ちがわかってから勉強すると身になる、と感じた。学生時代はそれが無く身につかないところがあった

○「勝佐備」で須佐之男命が新技術を研究し今までのやり方を変えようとすると、今までやっている人達のやり方を変えるということになり衝突

が起きる。テレワークに対しても「仕事は会社に行かないとダメ」という固定概念の人はいて、理解に苦しんでいる

○森さんの発言は女性問題を飛び越し男性も含め多様性を受け入れる受け入れないの議論に発展した。今の時代は「わきまえて」いては限界があり「わきまえない」で色々な意見を出し合うことが大切であると多くの人に認識されていることがわかり、多様性が大分根付いてきたと感じた

○須佐之男命が現世に行くことが「天下り」と表現されており、本来、尊い人が下界に降りて役割を果たすことを意味するのだと思った。今では役人が民間で面倒を見てもらうと捉えられているが、公人であった能力を民間に生かすことが本意なのでは。例えば無償で天下る、くらいが必要なのではと思った

■【次回予定】:

2021年3月27日(土) 9:30~11:30

※次回もZoomにより「天岩屋戸」を味わう予定

■参加申込方法:

開催日前日正午までに、下記必要事項を記入の上、メールにてお申し込みください。

【必要事項】 所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

【申込先】 (担当:小林)

reading-circle@womencivilengineers.com

以上



Zoomでの開催の様子